一大交流の場　―ＤＥＶＡＮＤＡ展―

佐藤　弘子（東京都／協同総合研究所事務局員）

〝環境を大切にし、いきいきとした農林水産業を実現するために行動するネットワーク〟

Do it Eco Vital Action Network for Dynamic Agrinative――ＤＥＶＡＮＤＡ展が２月27日（日）「第一次産業独立宣言」を掲げて、晴海の東京国際見本市会場で開かれた。

主催は大地を守る会・らでいっしゅぼーや・日本消費者連盟・生活クラブ生協連合・そして生産者団体など十数団体。

いのちの源泉となるべき第一次産業が軽視され工業中心できた社会が大きく揺れ動き、効率や生産性を追い求めた価値基準では立ちゆかなくなっている現在、第一次産業のもつ原理「環境」と「いのち」を大切にする新しい社会のシステム（一大ネットワーク）をつくろうというのが今回の呼びかけである。

当日、晴海の会場には、200を越す出店が軒をつらねていた。有機農産物・水産物・食品・環境問題にかかわる製品、そしてＮＧＯ・市民運動・消費者運動……販売から社会への問題提起まで、主旨に賛同するものは〝何でも有り〟の世界。会場の¼を占めるイベントスペースでは、ライブやシンポジウムが行われ人々が溢れていた（翌日の新聞報道によると１万５千人）。その他に写真展「凶作」、第一次産業の求人コーナー、子どもＤＥＶＡＮＤＡと盛りだくさん。

出店の中には巨大な大根を展示した（無農薬とはうたっているが、バイオ？肥料？……）少し首をかしげるものもあったが、日頃それぞれに意識し、耳にしていた生産者グループや運動体がともかく１つのステージに集まったという印象ではあった。

労協グループからは、㈱エコテックが、ドラム式洗濯機『エコドラム』、大気汚染測定器『エコアナライザー』、廃食油からの石けん製造機『エコサボン』『サボンミニ』を展示し説明に追われていた。又、北海道からは国労闘争団の労働者協同組合「おといねっぷ」の羊羹や木工製品も並べられていた。こういった場へ出て積極的なＰＲ、情報交流は必要なことだと思う。

様々な運動が交差し合う中で、金太郎アメ的出合いや、思いがけない出合いといった光景もみられたが、どんな場合にしろそれぞれにとって大きな交流の場であったことは確かである。何よりも楽しんでできるエネルギーはすばらしいと思う。

しかし、これはひとつのお祭り。それぞれのグループや個人のとりくみは仕事や生活のひとつひとつからスタートした現状への訴えであり、挑戦であると思うが、各々の独自性を持ちながら、第一次産業ひいては社会構造の中の問題を共通のものとして論議していける場はどこなのか。このエネルギーがそういった場を創り出すきっかけであってほしいと思う。